



死者の訪れる夢 『金瓶梅』の心理描写

著者	戸田 聖子
雑誌名	東北大学中国語学文学論集
巻	16
ページ	73-92
発行年	2011-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/54180

死者の訪れる夢—『金瓶梅』の心理描写—

戸田 聖子

はじめに

「夢」は現実と非現実のはざまにあり、そこでは人の想像力が及ぶかぎりの様々な出来事が自在に起こりうる。

この世の現実をリアルに描くことに主眼を置く『金瓶梅』では、夢の描写はさほど多くない。夢ともうつつともつかぬぼんやりしたものや、狐狸のたぐいに化かされたとも思われるもの、見た夢の内容を人に語るだけの場面などを含めても二十か所ほどであろうか。しかも『金瓶梅』においては、その数少ない夢の場面の直後に、夢を見た者を現実に戻すようなセリフを別の誰かに語らせることがよくある。

第六十七回、西門家第五夫人の潘金蓮は、夫の西門慶に向かって“夢是心頭想”（「夢は心に思っていることを見るものよ」）と言う。このセリフの後には“噴嚏鼻子癢”（「くしゃみをするのは鼻がかゆいからよ」）という言葉が続き、この二句で、「いかなることにでも、それが起こるにはそれなりのちゃんとした原因があるのだ」という意味となる。死んだ第六夫人李瓶児に夢の中で会ったと語る西門慶に対して、潘金蓮は、その夢が完全に西門慶の李瓶児を想う心の表れであり、それ以外のなにものでもないのだと、嫉妬まじりに断言するのである。

そして第七十九回には、今度は西門慶が正妻である呉月娘に向かって“夢是心頭想”と、第六十七回に潘金蓮が言ったのと同じセリフを口にする。呉月娘が見たのは、潘金蓮と死んだ李瓶児が長上着を取り合って大喧嘩をし、呉月娘がそれに腹を立てるという夢だった。それを聞いた西門慶は、夢で喧嘩のもととなっていた長上着を実際に呉月娘に作ってやることにする。西門慶の判断では、そんな夢を見たのは、呉月娘がかねてより長上着を欲しいと思っていたからに違いない、ということになるのである。ここでも、西門慶によって、心のありようこそが人に夢を見せるのだということが示される。

かくのごとく夢は、『金瓶梅』の登場人物たちによってすでに、現実生きる人の心の内

を表わすものと明確に規定されている。つまり夢は人の潜在意識が見せるものでしかないという、きわめて常識的な判断がなされているわけである。

しかし、夢の科学的な解釈は別として、小説にあっては、そもそも現実の世界の描写だけでは描ききれないものを描くためにこそ、「夢」という手段は用いられるのであろうし、『金瓶梅』でもそれは同じであろう。ならば、『金瓶梅』の小説世界の現実では描ききることができず、ことさらに「夢」を使って描く必要のあるものとは、果たして何であったのだろうか。

本稿では、『金瓶梅』の「夢」の描写をたどりつつ、現実には軸足を置きながらもなお描かれる「夢」の場面に込められた作者の意図を探っていきたい。

一、「死」と「死者」－『金瓶梅』の「夢」の数々

『金瓶梅』で最初に登場する夢は、第九回、武松のもとへ、潘金蓮と西門慶に殺された兄の武大が霊となって出現するというものである。死者の霊が自らの尋常ならざる死を訴えるために生者のもとへ現われるという形の夢であるが、元になっている『水滸伝』と引き比べて見た場合、わずかな字句の違いはあっても、ほぼ同一の文章がそのまま使われているので、これを『金瓶梅』のオリジナルと言うことはできない⁽¹⁾。武松の夢に現われた武大の霊は、彼が生きていたときのぐずぐずした性格そのままに、せっかく登場したにもかかわらず、自分が誰に殺されたかということさえはっきり述べることもできずに、武松の陽の気にあてられて、あっけなく消え去っていく。

『金瓶梅』オリジナルの夢は第十七回、李瓶児が西門慶に恋焦がれるあまり、狐狸のたぐいに化かされて夢うつつの状態となる場面から始まる。

そして次に描かれるのは、李瓶児がわが子を亡くし、自らも病に倒れて見る夢であり、前夫花子虚があゝの世からやって来て李瓶児を責めさいなむ。この夢は第五十九回、六十回、六十二回の長きにわたり、李瓶児が死に至るまで幾度となく繰り返し描かれる。

また第六十二回では、李瓶児が自らの死に臨んで、女中の迎春の夢枕に立って別れを告げる。迎春が目覚めたときには、李瓶児はすでにこと切れている。

迎春與綉春在面前地坪上搭著舖，那裏剛睡倒，沒半晌時辰，正在睡思昏沉之際，夢見李瓶兒下炕來，推了迎春一推，囑咐：你每看家，我去也。忽然驚醒，見卓上燈尚未滅，向床上視之，還面朝裏，摸了摸，口內已無氣矣⁽²⁾。（迎春は綉春と床の上に布団を敷いて寝ましたが、眠りについて半刻ほど経ったのでしょうか、ちょうどぐっす

り寝込んだ頃、夢に李瓶児が炕から下り、迎春を突っついて、「お前たち、留守番をしておくれ。私は出かけますからね。」と言いつけました。はっと目を覚ますと、テーブルにはまだ明かりがともっています。寝床の上の李瓶児を見てみると、奥を向いたままでしたが、手を触れてみると、もう息がありません。）（第六十二回）

同じ第六十二回、西門慶とその友人の応伯爵は、前の晩、ほぼ同時にかんざしの折れる夢を見ていたことを知る。その夢を見たのはちょうど李瓶児の死と同時刻のことであり、二人そろって李瓶児の死を象徴する夢を見ていたことが判明する。

李瓶児が死ぬと今度は西門慶が李瓶児の夢を見る。第六十七回、七十一回と二度にわたり、死んだ李瓶児が夢で西門慶のもとを訪れる。夢の中で李瓶児は生きていたときと何ら変わりのない深い愛情で西門慶に接し、西門慶もそれに応えて、李瓶児とねんごろに情を交わすのであった。

第七十九回、長上着がもとになって争う夢を呉月娘が見たのは前述のとおりである。その後、荒淫がたたって西門慶が病に倒れる。西門慶の死が近づくと、呉月娘が「大きな建物が倒れかけ、紅い着物を身にまとい、緑の玉のかんざしを落としてこわし、つまづいて菱花鏡を割る」という夢を見る。この夢は占い師の呉神仙により意味が解き明かされて、夫の西門慶の死がまもなく訪れ、一家が離散する運命にあることが分かるという趣向となっている。ここでも、折れたかんざしが死の訪れを象徴している。また、死の直前には西門慶自身が、自らが手にかけて死なせたに等しい武大と花子虚の到来を一瞬だけ夢に見る。

第八十八回、武松によってついに殺されるに至った潘金蓮が、死後に陳経済と春梅の夢にそれぞれ現れて、野ざらしになっている自分の屍を埋葬してほしいと哀願する。

第九十三回、落ちぶれた陳経済が、羽振りの良かった昔の生活を夢に見る。

第百回、春梅が嫁いだ先の周守備が戦いで命を落とすが、その際には、周守備の息子が旗竿の折れる夢を見る。これもかんざしと同様に人の死を象徴するものであった。そして最後に、金の軍勢に追われて逃げ出した呉月娘が見たのは、息子孝哥が殺される夢であった。

こうして見ると、狐狸に化かされたらしきものや、昔の生活を夢に見るようないくつかのものを除けば、『金瓶梅』の夢はそのほとんどが「死」と「死者」に関するものに限られていることが分かる。物が壊れたり折れたりすることが「死」の象徴であるとする、きわめて簡単で断片的なものから、死者が生者のもとを訪れて、何らかのコミュニケーションをとるというストーリー性のあるものまで、形式はさまざまだが、『金瓶梅』の夢はおしなべて「死」のイメージに満ちている。

一般的に言えば、文学作品での夢の使われ方は多岐にわたっており⁽³⁾、「死」のイメージ

のみに限定されるものではない。夢は現実と非現実をつなぐ便利なツールであるため、小説においては、設定された小説世界の現実にとだわることなくして、想像力を思う存分飛翔させることが可能となる。夢であれば、現実には存在しないユートピアを訪れることもできるし、時間や空間を凝縮したり折りたたんだりすることも可能になる。

『金瓶梅』の夢の描写の最後に必ずと言っていいほど付け加えられている決まり文句に「南柯一夢」がある。小説の中では、気がついてみれば単なる夢でしかなかったということ表現するために使われている言葉だが、唐の伝奇に基づくこの「南柯一夢」の故事などは、ユートピア訪問の物語であると同時に、時空を凝縮した物語の代表的なものでもあろう。同様の要素を有しているものとしては、他にも「黄粱夢」・「邯鄲夢」の故事などが有名である⁽⁴⁾。

また夢は、通常的手段では知り得ない特殊な情報を登場人物や読者に知らしめることができるものであるため、登場人物たちのこれから運命を指し示し、そこから先の物語の展開をほのめかすための場としても適しており、その手の使われ方は、以下に記すように、他の長篇白話小説では比較的多く見受けられる。

二、運命を指し示す「夢」

登場人物の運命は、物語全体の枠組み、構成にかかわる重要なものである。そして、そういう夢に現われて、登場人物たちにこれから先の運命を指し示す役割は、主に神々の手にゆだねられる。

『水滸伝』第四十二回、主人公宋江は梁山泊に入る覚悟を固めると、故郷に一度帰り、父や弟をともなつて梁山泊の仲間入りをしようとする。ところが、そこで宋江の帰郷を待ちかまえていた趙能、趙得の二人の都頭に逮捕されそうになって、環道村の九天玄女の廟に隠れて難を逃れる。その廟の中でいつの間にかひと眠りし、夢の中で九天玄女より「天言」四句と「天書」三巻を授けられる。天言はこれからの宋江及び梁山泊の好漢たちの行く末を暗示し、天書三巻にも彼らの進むべき道と運命が記されていた。宋江はことあるごとに天書をひもとき、その時々の方策を決定する。さらに第六十五回、戦いの途中危機に陥った際にも、九天玄女は宋江の夢に現われて策を授けてくれるのであった。

また『水滸伝』においては、梁山泊の先代の首領である晁蓋も、死してのち宋江の夢に現れて、宋江に危機を知らせる（第六十五回）。晁蓋は早い段階で死んで宋江に梁山泊の首領としての地位を譲り、その後は梁山泊の守り神のような存在になったと考えられる。な

らば女神である九天玄女と同じように夢で宋江の前に現われ、同じように宋江を支えるのも当然のことであるかもしれない。

『紅樓夢』はその名の示すとおり、そもそも物語全体が一つの壮大な夢として設定されているが、その第五回、主人公である賈宝玉が夢で太虚幻境を訪れ、そこで警幻仙姑から十二人の美少女たちの運命を見せられ、これから語られる『紅樓夢』という物語のすべてを知らされる。しかし彼は無意識のうちにそれを心の奥底にしまいこみ、その上で運命の流れに我が身をゆだねる。

また『紅樓夢』第十三回では、秦可卿がその死の直前、王熙鳳の夢に現われて別れを告げる⁽⁵⁾が、その際に、彼女らが共に属する賈一族の今後についての懸念を縷々述べ、これから一族を襲うであろう運命を暗示し、一族を切り盛りする王熙鳳が今後取るべき方針を詳細に教授する。ここでもまた早世する秦可卿が道しるべの女神としての役割を果たしている。

『金瓶梅』の生まれるもととなった『水滸伝』でも、『金瓶梅』の影響を大きく受けているとされる『紅樓夢』⁽⁶⁾においても、小説全体の枠組みにつながる重要な登場人物たちの運命は、超越的存在である女神などにより、夢という場において指し示されているのである。

では、『金瓶梅』ではどうであろうか。『金瓶梅』の小説世界にはそもそも、夢で運命を前もって知らせ、生き延びるための知恵を授けてくれる美しい女神もいなければ、あの世から救いの手を差し伸べてくれる親切な先達も存在しない。『金瓶梅』では、夢であっても神は現れず、夢であっても救いは来ないのである。『金瓶梅』にも、登場人物のこれからの運命が語られる場面はある。しかし『金瓶梅』で運命が語られるのは夢の場ではなく、彼らの運命を語ってくれるのは女神などの超越的存在ではない。それはきわめて日常的な日々の暮らしの中、ある日ふらりとやって来た怪しげな占い師、ただの人間によってなされるのである。

第二十九回、呉神仙という人相見がやって来て、西門家の人々の運命を占う。占いが終わり、呉神仙が帰って行くと、西門家の人々はこんな会話を交わす。

西門慶送神仙出，回到後廳，問月娘眾人所相何如。月娘道：相的也都好，只是三個人相不著。西門慶道：那三個人相不著。月娘道：相李大姐有實疾，到明日生貴子。他見〔如〕今懷著身孕，這個也罷了。相咱家大姐到明日受折磨，不知怎的折磨。相春梅後日來也生貴子，或者只怕你用了他，各人子孫也看不見。我只不信說他春梅後來戴珠冠，有夫人之分。端的咱家又沒官，那討珠冠來。就有珠冠，也輪不到他頭上。

（西門慶は神仙を送り出して奥の広間に戻ると、月娘はじめ皆の者に、今の占い、

どうだったと尋ねました。月娘が、「みんなよく当たりましたわ。でも、三人だけが、ちょっと外れたようね。」と言います。「どの三人が外れたって？」と西門慶。「李ねえさんに病気があるとか、そのうち立派な子を生むとか言ってたけど、現にあの人が今身ごもっているのを見てるんだもの。それはまあいいとしても、うちの嬢がそのうちひどい目に遭うなんて、どういうことなのかしら。春梅もそのうち立派な子を生むなんて言ってたけど、あなたがあの子に手をつけたもんだから、他の誰の子のことも見えなくなっちゃったのかしら。それに、あの春梅がさきぎ冠をかぶって、奥方さまになるなんて信じられないわ。実際のところ、私たちはお役人でもなんでもないんだから、冠なんか手に入るもんですか。たとえ手に入ったところで、あの子の頭なんかには回ってきませんよ。」（第二十九回）

呉月娘は納得のいかない様子でいろいろとあげつらい、西門慶はこれをなだめて言う。

他相我目下有平地登雲之喜 加官進祿之榮 我那得官來 他見春梅和你每站在一處，又打扮不同，戴著銀絲雲髻兒，只當是你我親生養女兒一般，或後來匹配名門，招個貴婿，故說有些珠冠之分。自古算的著命，弄不著[行]，相逐心生，相隨心滅。周大人送來，咱不好鬻了他的頭，教他相相，出疑罷了。（「俺には今、平地登雲の喜び、加官進祿の榮えがあるなんて言ってたけど、俺が官職なんかにありつけるもんか。それに春梅がお前たちと一緒に立っていて、身なりも違い、銀糸のつけ髻なんかしているのを見たもんだから、春梅が俺たちの本当の娘で、やがては名門と縁組をして、身分の高い婿を持つかもしれんぐらいに思ったんだろう。だから、冠をかぶるなんて言ったんだよ。昔から、当たるも八卦、当たらぬも八卦、相は心を逐うて生じ、相は心に随うて滅すとかいうじゃないか。周大人が寄越したのに、顔をつぶすのも具合が悪いから観てもらっただけさ。あんまり気にするんじゃないよ。」）（第二十九回）

李瓶児が子供を生むことも、西門のお嬢さんがみじめな死に方をする 것도、春梅が冠をかぶり立派な奥方さまになってあとつぎの子供を生むことも、占いは彼女らの運命をことごとく言い当てている。物語はこの後、呉神仙の占い通りに進んでいく。占いには、死や破滅を暗示する、きわめて不吉な予言も数多く含まれているのだが、呉神仙の表現の巧みさがさりげなくそれを覆い隠しているので、西門家の面々がそれを深く気に留めることはない。怪しげな占い師でしかない呉神仙の言葉は、西門家の面々をさほど感服させるようなこともなく、登場人物の中の誰の記憶にもとどめられずに終わる。その占いが彼らの運命を正しく指し示しているということを知るのは、作者と、最後まで小説を読み進めた読者だけなのである。

これと同様に、第四十六回では亀占いの婆さんが呉月娘、孟玉楼、李瓶児の三人を占い、第九十六回には、落ちぶれた陳経済が、麻衣神相の占いを得意とする葉頭陀に自分を占ってもらった場面がある。どちらも第二十九回と同様、占いの中身は実は正しいのだが、だからといって何がどう変わるというわけでもない。登場人物たちにしてみれば、ただ占ってもらったという事実が残るだけである。

『金瓶梅』の登場人物たちの運命は、夢を介した女神の託宣では語られない。『金瓶梅』では、たとえ夢であっても、女神のような非現実的存在は許されないし、そういった形での超自然的な助けはどこからもやって来ない。登場人物たちは、作者によって与えられた各々の運命を自らの才覚で生きていくほかないのである。作者はこの『金瓶梅』という小説に超越的存在を登場させることを極力回避し、登場人物の運命を、あくまでも小説世界の現実の中にのみ置こうとしている。

運命と係わる夢を意識的に回避していると思われる『金瓶梅』において、一度だけそれらしい夢が描かれる場面がある。それは第百回、金の軍勢が迫り、呉月娘たちが家を逃げ出して、荒れ野原の中で普静和尚に遭遇した時のことである。普静和尚は十年前の約束を持ち出して、息子の孝哥を弟子として差し出すよう要求するが、呉月娘はそれを断る。一行は普静和尚に案内されてひとまず永福寺に宿を借りることになるが、その夜、寝つかれずにいた女中の小玉が目撃するのは、過去に西門一家にかかわって死んだ人々が普静和尚によって次々と済度されていく様子であった。小玉は呉月娘を起こしてそのことを話そうとするが、呉月娘はぐっすり眠っていて起きようとしなない。眠っている呉月娘は長い夢を見ている。夢の中で呉月娘は旅を続けているが、その途中、望まぬ縁組を無理強いさせられた挙句、息子孝哥を殺されてしまう。

月娘見砍死孝哥兒，不覺大叫一聲，不想撒手驚覺，卻是南柯一夢。誠〈的〉渾身是汗，遍體生津，連道：怪哉，怪哉。（月娘は、孝哥が斬り殺されたのを見て、思わずあっと大声をあげました。ところが、はっと目覚めてみれば、なんと南柯の一夢です。驚きのあまり体中汗ぐっしょりで、「変だわ、変だわ」としきりにつぶやきます。）

（第百回）

普静和尚によれば、孝哥は西門慶の生まれ変わりであり⁽⁷⁾、呉月娘が夢に見たのは、息子を和尚の弟子として出家させなかった場合のもう一つの未来だとのことであった。呉月娘はこの夢を見たことにより、悔い改めて息子を出家させ、そこで『金瓶梅』の長い物語はようやく終わりを迎える。

孝哥が殺される夢は、普静和尚の力によって呉月娘の眼前に示され、それをきっかけとして呉月娘や孝哥の運命が変わるわけであるから、『金瓶梅』の中でも例外的な、運命をつ

かさどる夢といってよいかもしれない。夢を見せたのが普静和尚であることははっきりしている。普静和尚はこの場合、夢の中に登場するのではなく、現実の永福寺の中にいながらにして、常ならぬ力によって呉月娘に夢を見せる。その点に違いはあるが、他の小説に出現する女神たちと同質の超越者として、最後の最後に登場して物語を終わらせる役目を担っている。そして第百回の最後に置かれたこの夢だけが、現実の人間の運命を変える性質を有しているのだ。

だが、このことについて考える場合は、呉月娘の夢に先だって女中の小玉が見たものも併せて考慮すべきかと思われる。小玉は、死者たちが次々と普静和尚の前に立ち現われて、生まれ変わる先を告げて去っていく様子を目の当たりにするのだが、こちらは、どこにもそれが小玉の見た「夢」だとは書かれていない。小玉ははっきりと目覚めており、普静和尚はここでも、現実存在する永福寺の中で死者の済度という非現実的な行為を実行しているのである。

このエピソードが、「夢」という但し書きすら加えられておらず、完全に現実のものとして描かれていることは注目に値する。死者の生まれ変わりという非合理かつ非現実的なシーンが、「夢」という常識的な枠をすら外して描かれているということはつまり、この場面では、現実の中に非現実を混在させてしまっているということになるからである。それは、呉月娘の見た夢に、夢で運命を指し示し、夢で運命を変えるという設定を使ったのと同様、『金瓶梅』のそこまでの作風にはそぐわない、あまりにも無造作で乱暴な場面の描き方である⁽⁸⁾。ここでの現実と非現実の混在には、後に述べる西門慶の夢におけるそのような意図的な操作の痕は見られず、混在というよりはむしろ混乱という表現の方が適切かもしれない。

第百回で小玉の見た死者の生まれ変わりのエピソードと、それに続く呉月娘の見た夢については、西門慶の死（第七十九回）を境に『金瓶梅』という作品の質が変化することと関係があるのかもしれない。八十回以降、『金瓶梅』の叙述はきわめて簡略になり、描写の筆遣いに雑なものが混じるようになる⁽⁹⁾。それが別人の筆に拠ったためのものなのか、作者本人の創作態度に何らかの変化が生じたためのものなのかは不明であるが、とにかく大きな筆遣いの変化があることは明白である。物語の大団円で、大急ぎですべてのつじつまを合わせようとする作業の中、表面的なつじつま合わせは行なうことができて、微細な部分や、表立って現われないこだわりなどはないがしろにされがちとなる。ないがしろにされたこだわりの中に、現実と非現実を無造作に混在させていることや、夢が人の運命を左右してしまう場面を描くことも含まれるのではないだろうか。

そのように考えると、第八十八回、ついに武松に殺された潘金蓮が、陳経済と春梅の夢

に、髪をふり乱し、全身血だらけのみじめな姿で現われて、自らの屍の埋葬を懇願するというエピソードにもまた、それ以前の夢の話とは異質なものをを感じる。なぜなら潘金蓮はそもそもまったく「夢を見ない女」であり、「夢を見る女」である李瓶児とは対照的なキャラクターとして設定されているからである⁽¹⁰⁾。前述したように、第六十七回、夢に李瓶児の訪れを体験した西門慶に対して、その夢は西門慶の李瓶児に対する愛情の表れであり、それ以外のなにものでもないときっぱりと断じることのできるのが、潘金蓮という女なのである。稀代の悪女潘金蓮は、小説世界の現実の中で、良くも悪くも自らの人生を精いっぱい生きる。自分が殺した男の夢など一度も見ない。その潘金蓮が、この世の者でなくなったからといって、それだけで性格が一変し、めそめそとした、か弱くはかなげな女となって、自分の墓を作ってほしいと泣きつくだけのために陳經濟と春梅の夢に現われるというのは、大いに違和感のあるところである。物語の中に、生前の性格が死後に変化する必然性はどこにもない。むしろ『金瓶梅』では、夢に現れる死者の性格は、生前と何ら変化していないのが常である⁽¹¹⁾。したがって、これも西門慶の死以降の筆の運びの変化の中に数え入れるべき性質のものではないかと考えるところである。

三、李瓶児の「夢」

李瓶児は西門家に嫁ぐ前にも、一時足の遠のいた西門慶に恋焦がれるあまり、狐狸のたぐいに魅入られて、夢ともうつつとも知れぬ状態で病みついたことがあった。

婦人盼不見西門慶來，每日茶飯頓減，精神恍惚。到晚夕孤眠枕上，展轉躊躇。忽聽外邊打門，彷彿見西門慶來到。婦人迎門笑接，攜手進房，問其爽約之情，各訴衷腸之話，綢繆縈繞，徹夜歡娛。雞鳴天曉，頓抽身回去。婦人恍然驚覺，大呼一聲，精魂已失。慌了馮媽媽進房來看視，婦人說道：西門慶他剛纔出去，你關上門不曾。馮媽媽道：娘子想得心迷了，那裏得大官人來。影兒也沒有。婦人自此夢境隨邪，夜夜有狐狸假名抵姓，來攝其精髓。漸漸形容黃瘦，飲食不進，臥床不起。（女は毎日、西門慶を待ちわびるあまり、日々の食事の量も減り、頭もぼうつとしてきました。夜になると、ひとり寝の床で寝返りを打ってはあれこれと思い悩んでおります。すると突然、表で門を叩く音が聞こえて、西門慶が入ってくるのがぼんやり見えます。女は笑顔で出迎え、手を携えて部屋に入ります。約束をたがえたわけを尋ね、互いに胸の内を語り合いました。離れがたい思いで夜通し楽しみましたが、夜が明けると、男は急に身を引いて帰って行ってしまいました。女ははっと目を覚まして大声

を上げましたが、その時にはすでに気がおかしくなっております。あわてて馮ばあやが部屋に入ってみると、女は、「西門慶が今帰ったわ。お前、門は締めたかい。」と尋ねます。「奥さまは、あんまり思いつめて、おかしくなってしまうたんですね。旦那さまなんてお見えになっていませんよ。影も形も見えやしません。」と馮ばあや。女はそれからというものの、夢の中で物の怪につきまといわれることになります。毎晩、狐が化けて出て、その精髓を吸い取るものですから、だんだん顔はやつれ、食欲は衰えて、起き上がれなくなってしまいました。）（第十七回）

西門慶に焦がれる心の隙間を狐狸に狙われて化かされたのか、正常とは言えない状態に陥り、藪医者 of 蔣竹山にすがって、結果的に西門慶を裏切ることになるという物語の運びに、夢の場面を組み込んで、李瓶児が現実から遊離しやすく、夢に取り込まれやすい女性であるということを前もって読者に知らせ、後に李瓶児が悪夢に苦しめられ続けることへの伏線としても十分に機能させることに成功している。

李瓶児という女には、このように夢と親和性の高い性格設定があらかじめなされている。「夢を見る」李瓶児、「夢を見ない」潘金蓮という極端な対比がなされているのも、前述のとおりである。その李瓶児が、本格的に悪夢に苦しめられるのは、第五十九回の以下の場面が始まりである。

『金瓶梅』第五十九回、李瓶児は病の床にある息子官哥に添い寝をしていて、かつて自らが死に追いやった前夫花子虚の来訪を夢に見る。

當下李瓶児臥在床上，似睡不睡，夢見花子虚，從前門外來，身穿白衣，恰活時一般。見了李瓶児，厲聲罵道：潑賊淫婦，你如何抵盜我財物與西門慶。如今我告你去也。被李瓶児一手扯住他衣袖，央及道：好哥哥，你饒恕我則個。花子虚一頓，撒手驚覺，卻是南柯一夢。醒來手裏扯著，卻是官哥兒的衣衫袖子。連噁了幾口。道：怪哉，怪哉。一聽更鼓時，正打三更三點。這李瓶児諛的渾身冷汗，毛髮皆豎起來。（李瓶児は寢台に横になってうとうとするうちに、花子虚が表の門から入ってくるのを夢に見ます。白衣を着ていますが、生きていた時とまるでそっくりです。李瓶児を見ると、大声を張り上げ、「このあばずれめ、きさまはなぜ俺の財産を盗んで西門慶にやった。今こそ、訴えてやるぞ。」と言います。李瓶児は片手で花子虚の袖を引きおさえ、「あなた、ゆるしてちょうだい。」と哀願しますが、花子虚はそれをさっと振り払います。驚いて目を覚ますと、それは南柯の一夢で、引っ張っていたのは官哥の上着の袖でした。ため息をついて、「変だわ、変だわ。」とつぶやきます。ちょうどその時、太鼓が三更三點を打っているのが聞こえました。李瓶児は全身に冷や汗が流れ、髪の毛はすっかり逆立ってくるのでした。）（第五十九回）

あくる日やって来た西門慶は、李瓶児にこの夢のことを聞いて、きわめて現実的な反応を示す。

知道他死到那裏去了，此是你夢想舊境。只把心來放正著，休要理他。你休害怪……

（「あいつが死んでどこへ行ったかなんて知ったことか。そいつは、お前が昔のことを夢に見たんだよ。気を確かにもって、あいつのことなんか構うんじゃない。怖がることはないんだよ……」）（第五十九回）

李瓶児の息子官哥はこの後すぐひどいひきつけを起こして死んでしまうのだが、悲嘆にくれる李瓶児は、食事もろくに取れなくなり、次第に身体は病に冒されて衰弱し、精神の混濁した状態が続くようになる。そして第六十回、

一日、九月初旬、天氣淒涼，金風漸漸。李瓶兒夜間獨宿在房中，銀床枕冷，紗窗月浸，不覺思想孩兒，歛歛長嘆，似睡不睡，恍恍然恰似有人彈的窗櫺響。李瓶兒呼喚丫鬟，都睡熟了不答，乃自下床來，倒鞞弓鞋，翻披繡襖，開了房門，出戶視之。彷彿見花子虛抱著官哥兒叫他，新尋了房兒，同去居住。這李瓶兒見還捨[不]的西門慶，不肯去，雙手就去抱那孩兒。被花子虛只一推，跌倒在地。撒手驚覺，卻是南柯一夢，嚇了一身冷汗，嗚嗚咽咽只哭到天明。（ある日、それは九月の初旬で、もの寂しく、秋風が吹き始める頃のことでした。李瓶児は夜ひとりで部屋に寝ておりましたが、寝床も枕も冷え冷えとし、薄絹のかかった窓辺には月影が射していて、思い出されるのは子供のこと。すすり泣き、ため息を漏らしているうちに、眠ったとも眠らないともわからないぼんやりした中で、誰かが窓を叩く音がしたような気がします。李瓶児は女中を呼びましたが、皆ぐっすり眠っているとみえて、返事がありません。そこで、自分で寝台から下りて靴をつっかけ、上着を羽織ると、部屋の戸を開けて外へ出てみました。すると、官哥を抱いて立っている花子虚の姿がぼんやり目に映ります。花子虚は、新しく家を見つけたから一緒に住もうと呼びかけます。それでも李瓶児はやはり西門慶を捨てかねて、行く気になれず、両手を伸ばして子供を抱きとろうとしたところを、花子虚からぼんと突き飛ばされ、地べたに倒れてしまいました。驚き覚めてみれば、それは南柯の一夢、びっくりして体中に冷や汗をかき、夜明けまでしくしくと泣いておりました。）（第六十回）

この二度目の夢では、先日死んだばかりの息子の官哥が花子虚に抱かれて登場する。花子虚と一緒に住もうと李瓶児を誘うが、子供を取り上げられ、西門慶とも別れがたい李瓶児の苦しみは尋常なものではない。悪夢にさいなまれて李瓶児は心身ともに弱っていく。第六十二回、李瓶児は衰弱がさらに進み、明日をも知れぬ状態が続く中、再び夢の件を西門慶に切々と訴える。

我要對你說，也沒與你說：我不知怎的，但沒人在房裏，心中只害怕，恰似影影綽綽有人在我跟前一般。夜裏要便夢見他，恰似好時的，拏刀弄杖，和我廝嚷。孩子也在他懷裏。我去奪，反被他推我一交。說他那裏又買了房子，來纏了好幾遍，只叫我去。只不好對你說。（「私、申しあげたいことがあるんです。あなたにはまだ申し上げておりませんでしたけれど、部屋に人がいなくなると、私なぜだかとても恐くなるんです。まるで影のように誰かが私の前にいるような気がして。夜になるとその人が生きてた時みたいな様子で夢に現われて、刀を持ったり、杖を振り上げたりして、騒ぎ立てるんです。その人は子供を抱いていて、私がそれを取ろうとすると、押し倒されてしまうんです。自分は今度家を買ったんだと言って、私に何度もつきまとい、私を連れて行こうとするんです。ほんとに申しあげにくいことなんですけど。」）
（第六十二回）

西門慶はそれを聞くと、

人死如燈滅。這幾年，知道他往那裏去了。此是你病的久了，下邊流的你這神氣弱了。那裏有甚麼邪魔魍魎，家親外祟。（「人が死ぬってのはともしびが消えるようなもんなんだ。この何年か、あいつがどこへ行っちゃったかなんて知るもんか。これは、お前が長いこと病気をして、下の出血が止まらなくて、気持ちが弱っているからなんだよ。お化けとか、魔物なんてものはどこにもいやしないんだ。」）（第六十二回）
と言って聞かせる。魔除けの札を貰ってきたりもしてみるが、やはり何の効き目もない。

その後、夢に引きずり込まれ、のみ込まれそうになる李瓶児と、それをなだめすかして現実に戻そうとする西門慶の間に、同様のやり取りが幾度となく繰り返される。

【李瓶児】死了的他剛纔和兩個人來拏我，見你進來，躲出去了。（「死んだあの人が、さっき二人の人と一緒に私を捕まえに来ましたわ。あなたが入っていたのを見て、逃げて行きましたけど。」）

【西門慶】你休信邪，不妨事。昨日應二哥說，此是你虛極了……（「お前、そんなもん信じるんじゃないよ、大丈夫なんだから。昨日応二君も言っていたように、これは、お前が弱ったからなんだ……」）

【李瓶児】那廝他剛纔發狠而去，明日還來拏我哩。（「あいつ、さっき怒って出て行きましたけど、明日また、私を捕まえに来ますわ。」）

翌日もこのやりとりは続けられる。

【李瓶児】那廝但合上眼，只在我跟前纏。（「目をつむると、すぐあいつが目の前にやってきてつきまとうんです。」）

【西門慶】此是你神弱了，只把心放正著，休要疑影他……（「それはお前の気持ちが

弱っているからだよ。気を確かに持って、あいつのことなどあれこれ考えるんじゃないよ……」)

棺の手配が終わり、臨終間近となっても、李瓶児はまだ悪夢に苦しめられ続けている。

【李瓶児】我的哥哥，你還哄我哩。剛纔那廝領著兩個人又來，在我根前鬧了一回，說道：你請法師來遣我，我已告准在陰司，決不容你。發狠而去，明日便來拏我也。（「ねえ、あなたは私をだましていらっしゃるのね。さっき、またあいつが二人の人を連れて、私の前に現れましたわ。そして、しばらく騒いでから、こう言ったんです。お前は法師を呼んできて、俺を追っ払おうとしているが、俺はもう冥途へ訴えて、訴えは聞き届けられたんだから、お前を逃がしはせんぞ。そういつて怒って帰って行きました。明日はきっと私を捕まえに来ますわ。）」

【西門慶】我的姐姐，你把心來放正著，休要理他……（「ねえ、お前、気をたしかに持っておくれ。あいつなんか、相手にするんじゃないよ……」)

これらはすべて第六十二回の中のわずか数日のうちに立て続けに起こったことである。夢で花子虚の来訪が繰り返され、その都度李瓶児の心身の衰弱は進み、なんとか現実引き戻そうとする西門慶の努力もむなしく、ついには死に至る。

李瓶児には、花子虚の夢を見て、花子虚に責めさいなまれるだけの理由がある。西門慶と結ばれたい一心で、夫である花子虚につらく当たり、重い病気にかかった花子虚を邪険に扱って、ろくに医者にも見せずに、ついには死なせてしまったという過去は、自らが病に倒れた今になって、李瓶児の心に重くのしかかってくる。さらに我が子官哥の死もまた、彼女に耐えられないほどの大きな悲しみと絶望をもたらす。自らの病の行く末は「死」しかないであろうという、確信に近い予感もまた恐怖と絶望に彩られる。李瓶児の罪悪感、苦痛、恐怖、悲しみそして絶望は、繰り返し同じ夢を見ることでその程度の尋常ならざるものが表わされる。そして夢を見るたびに、李瓶児は少しずつ「死」へと近づいていく。現実引き戻そうとする西門慶の言葉は、まったく効果がないどころか、李瓶児の感情の高まりをかえって刺激する。李瓶児のもろもろのマイナスの感情は、花子虚という「死者」の来訪する夢と共にとめどなく膨れあがり続け、それは彼女が「死」を迎えるまで続くのである。

四、西門慶の「夢」

李瓶児の死後、西門慶が見る李瓶児の夢もまた、西門慶が李瓶児に抱く強烈な思慕の情

や喪失感、悲しみを表わすものとしてあり、その点で前述の李瓶児の見る悪夢と同様、他の夢とは一線を画す存在である。

良久、忽聽有人掀的簾兒響。只見李瓶兒驀地進來，身穿縹紫衫，白絹裙亂挽烏雲，黃懨懨面容，向床前叫道：「我的哥哥，你在這裏睡哩。奴來見你一面。我被那廝告了我一狀，把我監在獄中，血水淋漓，與穢污在一處，整受了這些時苦。昨日蒙你堂上說了人情，減了我三等之罪。那廝再三不肯，發狠還要告了來拏你。我待要不來對你說，誠恐你早晚暗遭他毒手。我今尋安身之處去也，你須防範來。沒事少要在外吃夜酒，往那去早來家，千萬牢記。奴言休要忘了。說畢，二人抱頭放聲而哭。西門慶便問：「姐姐，你往那去，對我說。」李瓶兒頓脫撒手，卻是南柯一夢。西門慶從睡夢中直哭醒來，看見簾影射入書齋，正當卓午。追思起，由不的心中痛切。（しばらくすると簾をまく音がして、李瓶児がいきなり入ってきました。紫のひとえ上着に白絹の裙を身につけ、ざんばら髪に病みほうけた顔をしています。寝台の前にやって来て、「ねえあなた、ここでお休みになっていらっしゃったのね。あなたに一目お目にかかりに来ました。私、あいつに訴えられて、牢屋に閉じ込められておりました。血まみれになって、汚いものと一緒に暮らし、ずっと苦しみを受けておりましたの。昨日あなたがお上に贈り物をしてくださったおかげで、罪三等減じられました。ところが、あいつはどうしても承知せず、ひどく怒って、今度はあなたを訴えて捕まえてもらうなんて言っております。私はもう来ないつもりだったんですけど、あなたが今にあいつからこっそりやつつけられはしないかと思うと怖くって。私はこれから落ち着き場所を探しに行きますけれど、あなたはくれぐれもご用心なさってくださいね。ご用のないときには、外で夜酒を召し上がることはひかえ、どこへいらっしゃっても、早くお家へお帰りになってください。私の申し上げたことをよく覚えていらっしゃって、くれぐれも忘れないようにしてくださいな。」話し終えると、二人は抱き合って声をあげて泣きました。西門慶は「言っておくれよ、おまえはどこへ行くっていうんだい。」と尋ねます。すると李瓶児は手を放し、気が付いてみると、南柯の一夢です。西門慶は自分の泣き声で夢から覚めました。あたりを見れば、簾の影が書齋の中に差し込んで、ちょうどお午どき、思わず悲しみがこみ上げきます。）（第六十七回）

目覚めた西門慶のところへ潘金蓮がやって来る。泣いて目を赤くしている西門慶を見て、それと悟った潘金蓮は、李瓶児を想い続ける西門慶の心を現実に戻そうとする。それが本稿冒頭に挙げた“夢是心頭想，噴嚏鼻子癢”の二句である。

西門慶は夢で見たことの中の一つを潘金蓮に確認する。そこで判明したのは、李瓶児が

夢で身に着けていた「紫のひとえ上着に白絹の裙」が、李瓶児を棺に入れた際に女たちが彼女に着せてやったものと全く同じだったということであった。西門慶は口には出さず、心中ひそかにうなずく。西門慶にとっては、いくら潘金蓮がそんなことはあり得ないと否定しようとも、死んだ李瓶児が自分のもとを訪れたことが、まぎれもない事実であったと確信するに至る、きわめて大事な出来事である。幻想的な夢の中に忍び込ませた現実とのほんのわずかな整合性は、西門慶がもう一度李瓶児の来訪を夢に見る際にも示される。

這西門慶有酒的人，睡在枕畔，見都是綾錦被褥，貂鼠綉帳，火箱泥金暖閣床。在被窩裏，見滿窗月色。番來覆去睡不著。良久，只聞夜漏沉沉，花陰寂寂，寒風吹得那窗紙有聲。況離家已久，欲待要乎王經進來陪他睡，忽然聽得窗外有婦人語聲甚低，即披衣下床，靱著鞋襪悄悄啟戶視之。只見李瓶兒霧鬢雲鬟，淡妝麗雅，素白舊衫籠雪體，淡黃軟襪襯弓鞋，輕移蓮步，立于月下。西門慶一見，挽之入室，相抱而哭，說道：冤家，你如何在這裏。李瓶兒道：奴尋訪到此。對你說，我已尋了房兒了，今特來見你一面，早晚便搬[去]也。西門慶忙問道：你房兒在于何處。李瓶兒道：咫尺不遠，出此大街迤東，造釜巷中間便是。言訖，西門慶共他相偎相抱，上床雲雨，不勝美快之極。已而，整衣扶髻，徘徊不捨。李瓶兒叮嚀囑咐西門慶：我的哥哥，切記休貪夜飲，早早回家。那廝不時伺害于你。千萬勿忘〈奴〉言，是必記于心者。言訖，挽西門慶相送到家。走出大街，見月色如畫，果然往東轉過牌坊，到一小巷，旋踵見一座雙扇白板門，指道：此奴之家也。言畢，頓袖而入。西門慶急向前拉之，恍然驚覺，乃是南柯一夢。但見月影橫窗，花枝倒影矣。西門慶向褥底摸了摸，見精流滿席，餘香在被，殘唾猶甜。追悼莫及，悲不自勝。（西門慶はすっかり酔っぱらって横になりました。目に入るものは、綾錦のふとん、貂の毛皮にぬいとり帳、火桶に金泥の大寝台といったものばかり。布団の中からは、窓いっぱい差し込む月影が目に入ります。寝返りを打つばかりで、なかなか寝つかれずにいましたが、しばらくすると、聞こえるのは水時計の音、静まり返った花の蔭、寒風に吹かれて窓紙が音を立てます。家を離れてからすでに久しいことではあるし、王経を呼んで添い寝をさせようかと思っていた矢先、ふと窓の外から、かすかに女の声が聞こえてきます。そこで着物をひっかけて寝台を下り、靴をつっかけてそっと戸を開けて外を見ました。すると李瓶児が、美しい髻に薄化粧もゆかしく、白無地の古上着で雪のからだを包み、薄黄色の柔らかい靴下に弓なりの靴を履き、しずしずと歩み寄り、月影のもとに立っているではありませんか。西門慶はそれを見ると、すぐさまその手を取って部屋に引き入れ、互いに抱き合って泣きました。「お前、どうしてこんなところへ?」「お探ししましたわ。実は私、住まいが見つかりました。それでわざわざあな

たにお目にかかりに来たわけで、近いうちに引っ越そうと思っていますの。」「おまえの住まいって、どこなんだい。」と西門慶が急いでたずねると、「すぐ目と鼻の先で、ここを出て大通りを東へ行ったところ、造釜巷の中なんです。」と答えます。それから西門慶と李瓶児は抱き合い、寝台に上がって雲雨に及びましたが、その心地よさときたら何とも言えません。終えると、着物を整え髻を直しましたが、とても離れがたい気持ちです。李瓶児は「ねえ、あなた。どうか夜酒を飲むことはつつしんで、早くお家へお帰りくださいな。あいつがいつでもあなたに危害を加えようとしているんです。私の言うこと、決して忘れちゃいけませんよ。きっとおぼえておいてくださいな。」とねんごろに言って聞かせます。言い終わると、西門慶を連れて家まで送らせます。大通りへ出ると、月は真昼のように明るく、東へ行って牌坊を曲がり、小さな横町に入ると、じきに両開きの白木の門が見えてきました。李瓶児はそれを指さして、「ここが私の家なんですの。」といったかと思うと、袖を振り払ってさっと中へ入って行きました。西門慶は急いで進み出て、引き留めようとしたのですが、その拍子にはっと目が覚めてしまいました。これこそ南柯の一夢、見れば月影は窓に横たわり、花の枝が影を映しております。西門慶が褥をまさぐってみますと、そこら中に河が流れて、ほのかな香りが布団に残っており、口の中もまだ甘いのですが、いくら思い返してもおっつかず、むしろ悲しくなってくるのでした。）（第七十一回）

一度目の夢で住まい（＝生まれ変わり先）を探していた李瓶児は、二度目の夢でそれが見つかったと報告にやってくる。身なりも整い、髻も美しく結いあげられており、ざんばら髪に病みほうけた顔をしていた一度目の夢のときとは様子も一変している。そして二人は李瓶児が生きていたときと何ら変わるることなしに、ごく自然に「雲雨」の行為に及ぶ。夢の中での性行為の痕跡は、目覚めた後にも歴然と残っている。それもある意味で現実との整合性と言えるかもしれない。だがそれよりも注意すべきなのは、李瓶児が見つけて来たという新しい住まいのことである。この夢を見た次の日、西門慶が偶然造釜巷を通りがかると、そこには夢で見たのと全く同じ両開きの白木の門があった。それに気づいて、西門慶はいとも不思議な気持ちにおそわれる。

一度目の夢では、西門慶のもとを訪れた李瓶児の着物が、棺に入れた際に着せてやったものと同じであった。二度目の夢では、李瓶児が教えた生まれ変わり先と思われる家は実在するものであった。そのどちらをも西門慶は口にせず、心の内深くに大事にしまいこむ。

愛してやまない女を永久に失うという、きわめて大きな喪失感と絶望が見せる西門慶の夢は、長く美しく幻想的で、かつセクシュアルなものである。「夢を見る女」である李瓶児

と違い、西門慶は夢と現実を簡単に混同するようなキャラクターとして設定されてはいない。李瓶児が夢を見て苦しみ、混乱している際に、彼女を現実に戻そうと言葉を尽くすのは西門慶である。だが、そんな西門慶であっても、夢を見ずにはいられない。なぜなら西門慶の感じている喪失感と絶望は、現実の世界を描写する筆ではとても描き切れないほどに大きいからである。そして、そう簡単に夢に取り込まれたりすることのない西門慶の見る夢には、少しだけ西門慶向けの工夫が凝らされている。幻想的な夢の中に一筋だけ忍ばせた現実との整合性は、西門慶にとっての夢と現実との境界線を曖昧なものとする。そして、現実生きるリアリストである西門慶が現実を忘却して、存分に夢の中に入り込み、夢に惑溺することを可能にするのである。

おわりに

現実世界のくびきから解き放たれ、想像力によってどこまでも飛翔できるものであったはずの「夢」は、現実を描くことに優れた『金瓶梅』という小説においては、きわめて限定的な用いられ方をされるにとどまった。『金瓶梅』の夢では、ユートピアもタイムトラベルも語られない。登場人物たちのこれからの運命が語られることもなく、運命を指し示して彼らを助けてくれる超越的存在が夢の場に招き入れられることもなかった。そこからは、作者がたとえ夢であっても、超自然的で非合理的な事柄が小説世界の登場人物たちの現実を左右することのないよう、できる限りの配慮をほどこしているということがうかがえる。

もちろん、折れたかんざしが誰かの死を意味するというような、断片的でシンボリックな夢は、古来より伝わる夢占いの手法⁽¹²⁾をなぞるものであり、そこには現実的で合理的な解釈が不可能な要素も含まれてはいるが、それらの夢にしても、夢を見たことによって誰かの現実が変わってしまったりするようなことは決してない。

そういった配慮がなされたうえで、彼らは夢を見る。現実を描写するだけでは描き切れないほどに、どうしても大きくて強烈な感情が人を襲うとき、『金瓶梅』は登場人物たちに「夢」を見せるのだ。それは一般に言うところの、潜在意識が夢となって表出するという程度をはるかに越えて大きい。

明の嘉靖年間の人である陳士元は、『夢占逸旨』にて夢を九種類に大別したうえで、その中の一つに「情溢」の夢というものがあるとした⁽¹³⁾。「情溢」の夢とは、喜びや憂いの情が心に満ち、度を越えて溢れ出してついに夢となるものをいう。『金瓶梅』で描かれるところの、李瓶児の見る夢と西門慶の見る夢は、この「情溢」の夢の最たるものであろう。

李瓶児の場合、度を越えて夢となって溢れ出す「情」とは、おのれのなした悪行に対する罪悪感であり、我が子の死に対する悲しみであり、これからやってくる自らの死への恐怖である。現実へ引き戻そうとする西門慶の言葉もむなしく、李瓶児は「死者」である前夫花子虚に引きずられるようにして、「夢」＝「死」にのみ込まれていく。

西門慶の場合、夢に訪れる「死者」は、この世ではもう二度と会うことのできない愛しい女である。大きな喪失感と絶望の中で、現実と夢の間にはっきりと引かれていたはずの一本の線は、その夢にわずかに存在する現実との整合性によって、きわめて曖昧でぼんやりしたものになり、西門慶は心の奥底で、躊躇することなく「死者」である李瓶児に寄り添うようになる。「死者」に寄り添うようになった西門慶は、夢を見る以前よりずっと「死」に近づく。李瓶児が夢で忠告していたにもかかわらず、西門慶は李瓶児の危惧したとおり、その後も乱れた生活を改めることはなく、荒淫がたたって死んでしまうわけだが、その「死」の予兆は、「死者」である李瓶児との逢瀬を夢に見るようになった段階ですでに存在していたとも思われるのである。

このように、『金瓶梅』において「夢」は、登場人物の切迫した心理、強烈な感情が度を越えて心から溢れ出すさまを描写するものとしてあるが、より特徴的なのは、それらの「情溢」の夢は、いずれも限りなく「死」に近いところに存在しているということであろう。

『金瓶梅』では、「夢」という乗り物に乗って、「死」が現実を訪れる。

現実重視というスタンスを保ちながらも、「情」と「死」にこだわった「夢」の描き方は、『金瓶梅』ならではのものと言えよう。

⁽¹⁾ 『水滸伝』であっけなく武松に殺される西門慶と潘金蓮が、もしすぐには殺されずに生き延びたなら、という発想で作られたのが『金瓶梅』である。『金瓶梅』の冒頭部分は、『水滸伝』の第二十三回～二十七回まで、武松を主人公とするいわゆる「武十回」の前半部分がほぼそのまま繰り返されており、第九回の武松の見る武大の夢も、その中に含まれる。

⁽²⁾ 原文は『全本金瓶梅詞話』（香港太平書局、1982）に拠った。なお、白維国・ト鍵校注『金瓶梅詞話』（岳麓書社、1995）を参照し、誤字と思われるものは〔 〕で訂正し、脱字と思われるものは〈 〉で補った。

⁽³⁾ 劉文英、曹田玉著『夢与中国文化』（人民出版社、2003）では、文学作品における夢の芸術的機能を「虚構」・「抒情」・「感得」・「諷刺」・「構成」の五種に分類している。

⁽⁴⁾ 「南柯一夢」の故事は、唐の淳于棼が槐樹の南柯の下に臥し、夢に槐安国に至って国王の娘を娶り、南柯郡の太守となって栄華を極めたが、目覚めて槐樹の下を見れば、そこに

は大きな蟻塚があったというものである（李公佐『南柯太守伝』）。また「黄粱夢」や「邯鄲夢」の故事は、青年が邯鄲で道士から枕を借りて眠ったところ、富貴を極めた五十余年を送る夢を見たが、目覚めてみると、炊きかけの黄粱もまだ炊き上がっていないわずかな時間であったというものである（沈既済『枕中記』）。

⁽⁵⁾ この場面は、『金瓶梅』第六十二回の李瓶児の臨終シーンを彷彿とさせるものであり、『金瓶梅』と『紅樓夢』の距離の近さを実感させる要素の一つである。

⁽⁶⁾ 『脂硯齋重評石頭記』庚辰本第十三回眉批には“寫個個皆到，全無安逸之筆，深得金瓶壺奧”とあり、『紅樓夢』が『金瓶梅』の影響を受けていたことがよく分かる。『金瓶梅』と『紅樓夢』の関連性については、牧恵（『金瓶挿梅』百科文芸出版社、1999）、于承武（『金瓶梅平議』文津出版社、1992）、志村良治「豪商と淫婦－『金瓶梅』の世界－」（『中国小説の世界』評論社、1970）、井波律子（『中国の五大小説』岩波書店、2008）など多くの指摘がある。

⁽⁷⁾ 第百回のこのシーンで、普静和尚は孝哥が西門慶の生まれ変わりであるということを明言し、術の力で呉月娘たちに孝哥の本当の姿（くびに重たい枷をつけ、腰に鉄の鎖を巻いた西門慶）を見せる。しかしこの直前、普静和尚が経を唱えて済度する西門家ゆかりの死者たちの中に、すでに西門慶は登場しており、沈通という金持ちの次男沈銭として生まれ変わると自ら告げて去っている。一人の人間の生まれ変わりが二人に分裂しているのも、叙述の混乱の一つであろうか。

⁽⁸⁾ 第百回の普静和尚による死者の済度のシーンについては、第二十九回の呉神仙の占いと共に、『金瓶梅』という作品を創作するに至った動機を作者が明言している部分であるとして高く評価する見解もある（李洪政『金瓶梅解隠－作者、人物、情節』台湾商務印書館股份有限公司、2000）。

⁽⁹⁾ 第七十九回の西門慶の死後、『金瓶梅』という小説のタッチが変化することについては、日下翠『『金瓶梅』作者考』（『中文研究集刊』創刊号、1988）、志村良治「豪商と淫婦－『金瓶梅』の世界－」（『中国小説の世界』評論社、1970）、澤田瑞穂『『金瓶梅』の研究と資料』（『中国の八大小説』大阪市立大学中国文学研究室編、平凡社、1965）、荒木猛『『金瓶梅』の成立に関する一考察－とくに八十一回以降について－』（『中国言語文化研究』第一号、2000）など多くの指摘がある。

⁽¹⁰⁾ 川島優子「李瓶児論」（『九州中国学会報』第43号、2005）には、西門家に嫁ぐまでの経緯において「潘金蓮の物語」と「李瓶児の物語」が①夫に不満を抱く→②夫がいながら西門慶と密通する→③夫を死に至らしめる→④西門慶に待たされ、さびしい思いをする→⑤浮気が原因で西門慶に責められる、ときわめて酷似しており、そのうえで、嫁いだ後に形成される李瓶児の優しく忍耐強い形象が、嫉妬深い潘金蓮との対比において成り立っているという指摘がある。

⁽¹¹⁾武松の夢に現われる兄の武大は、生きていた時と同じはっきりしない態度を示して弟にあきられ、李瓶児の夢に現われる前夫花子虚は、財産が李瓶児を通じて西門慶に取られたという、きわめて現実的な損害を根拠に李瓶児を責める。その李瓶児は死後西門慶の夢に現われた際も、生前と何ら変わらぬ愛情を西門慶に示し、二人の間には生前と同じように性交渉までが行なわれるのである。

⁽¹²⁾ 羅建平『夜の眼睛－中国夢文化象征』（四川人民出版社、2005）では、象徴法、連想法、類推法、易占法、解字法、諧音法などを夢占いの方法として挙げ、これらを相互に関連づけながら、夢の内容を分析して吉凶の判断に供するのが夢占いであるとしている。

⁽¹³⁾ 劉文英『中国の夢判断』（東方書店、1997）参照。人はなぜ夢を見るのか、ということは、太古の昔より人々が考え続けた問題である。夢を見る心理的な原因について、『周礼』は「六夢」（正夢、噩夢、思夢、寤夢、喜夢、惧夢）という区分を行ない、東晋の張湛は『列子注』にて「情化往復」（感情が変化して行ったり来たりする）説を唱えた。しかしあらゆる「情化」（感情の変化）が夢となって現れるわけではない。「情化」が転じて夢となるには、その感情が強烈でかつ持続しなければならない。つまり「情化」に一定の深さと強さが必要となる。李泰伯は「心溺」すれば夢を見ると主張し、陳士元は『夢占逸旨』において、「情溢」すれば夢になると主張した。